

魔法の種プロジェクト 最終成果報告書

報告者氏名： 佐伯 郁代 所属：岩見沢市立明成中学校（北海道） 記録日：2017年2月11日
キーワード：コミュニケーション、感情の表出、語彙力、発語、写真・動画

【対象児の情報】

- ・ 学年 中学校1年
- ・ 障害と困難の内容

◎ 知的障がいを伴う自閉症

- ・ 単純な計算や漢字の読み書きの学習は得意である。
- ・ 算数の文章題からの立式はできない。
- ・ お金を使ったり、時刻表から読み取ったりという生活に根ざした学習は苦手である。
- ・ 聴覚が過敏である。破裂音や教室の雑踏にパニックを起こす。
- ・ 想定外の動きをする生徒に拒否反応（近づくとパニック）を示す。
- ・ 自分の困っている状況を説明できない。言葉で伝えようとしない。
- ・ 自分の感情を表出させるための語彙が少ない。

【活動進捗】

- ・ 当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

1 将来の自立に向けて身につけた知識を日常生活で活用できるようにする。

生活場面の内で、学習内容を活用する力を育成する。（読み書き・計算・計測・作図など）

2. 自分の中の思いや感情の多様性に気づく

基本的な会話・文章表現は、2～3語文で構成されている。その中には、肯定的感情しか記述されない。感情にはレベルがあり、どのくらい楽しかった、うれしかった、悲しかったのかを記録したい。「おいしかった」のは、どんなふうにおいしかったのかを伝えられるようになってほしい。

- ・ 実施期間

2016年5月～2017年2月

- ・ 実施者

佐伯郁代（研究採択者 本人）

- ・ 実施者と対象児の関係

自閉・情緒学級担任 特別支援コーディネーター

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

1 将来の自立に向けて身につけた知識を日常生活で活用できるようにする。

漢字の読み書きは小学校配当漢字 1006 字がほぼ定着しているので、文章表記には適切に用いることができる。ノートテイクには時間はかかるができています。書字に困難はなく、字形や大きさを整えて書くことができる。書き順にやや課題が残る。

算数の四則計算については、整数・分数・小数ともに定着しているが、実生活につながる知識ではない。時間の計算、お金の計算、量とかさ、面積、温度変化、平均、作図などを苦手とする。特に文章題は苦手である。

言語による指示は、通りにくい。ルーティーンや学習作業としての学力は身につけている。しかし、問い方のパターンが変わると対応できない。また、時間やお金、(長さや量の)計測等は、実物では操作できない。

例：プリントを配布する⇒計算プリント→スラスラ解く

漢字の読み書きプリント→スラスラ解く

読み書きのプリント以外の漢字学習プリントは、混乱する。

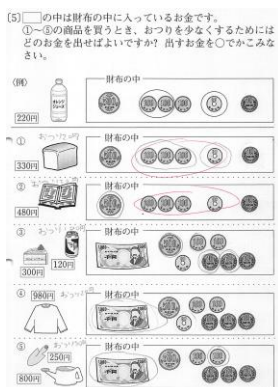
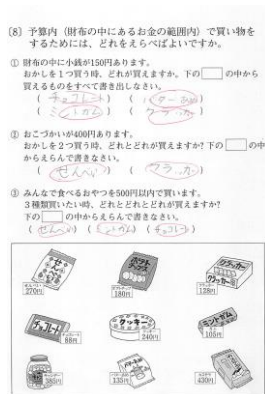
文章読解は、設問を読み解けない。

中学校の定期テスト等によくある設問形式の「適切な語を選びなさい」「適切な語を選び記号で答えなさい」には、(補足説明をしても)対応できない。

短冊を計測し指定された長さに線を引く指示に対し、長さを計測後はさみで切り取ってしまう。

「見本と同じく」という言語指示を出すと、「同じく」という言葉だけを捉えて、全ての長さを(見本も含めて)同じ長さに切りそろえてしまう。

プリントでは出来ていたお金の数え方も実物では混乱し、受け渡しも出来なくなる。模造貨幣を使つての買い物学習(お店屋さんごっこ)授業では、欲しいものを選びレジに行って、自分の持っているお金全てを出し、『必要なだけとってください』という雰囲気では立っている、という状況であった。



【学習プリントでは、理解している】

2 自分の中の思いや感情の多様性に気づく

基本的な会話、文章表現は、2~3 語文で構成されている。「○○食べました。」「お母さん泣きました。」「おなか痛いのでトイレ行きます」というかんじである。

振り返りの作文・日記は「○○へ行きました。楽しかったです。」「お父さんと買い物に行きました。楽しかったです。」「昨日の晩ご飯は、○○でした。おいしかったです。」等の 2 語文~ 3 語文で構成される。その中には、「楽しかった」「おいしかった」など限られた種類の肯定的感情しか記述されない。

感情に関する事の中で気になるのは、「○○(弟)、怒られました。」「お母さん泣きました。」「○○(弟)

泣きました。」と、他者の負の感情を伝えることが出来るのに対し、自分の思いについては「◇◇（自分）悲しくなかったです。」「お母さんは泣きました。◇◇は泣きたくならなかったです。」というような否定形での表現になる。今までの生活の中で、負の感情を表出することは「悪いこと」。泣いたり怒ったりすることは、「立派じゃない」。本人との会話から静かにじっと座っていることが「良いこと」として、「泣くこと」「怒ること」「他者を否定することは行けないこと」という彼の中の判断基準があり、行動・情緒の表出につながっていると受け取れる。

○活動の具体的内容

1 将来の自立に向けて身につけた知識を日常生活で活用できるようにする。

①アプリ【お金の学習】～体験的学びから自立への道を～



机上学習での計算練習は、正確に行える。しかし、入学時点では、自分でお金を使用したことがなかった。支払いの仕方、おつりも具体物になると操作できない。

まずは、数字と金種と具体物（お金）を一致させる学習から始めた。金額と金種の一致は、程なく出来るようになった。

次のステップとしてアプリを使用して、金額とお金を一致させる学習に進んだ。レベルをどんどん上げていくことが、学習意欲にもつながり、指定された金額を『ちょうど出す』事が出来るようになった。最高レベルでの、6つの種類の硬貨を組み合わせ、お金を出せるようになった。

次は、アプリ「お金の学習2」で、お金を数える事に挑戦した。楽しみながらお金に親しむことが出来た。

【自動販売機で実践練習】

社会見学や展示即売会等の校外学習に向けて、実践的に練習を重ねた。お金には興味を持ち、「使いたい」⇒「買い物に行きたい」につなげ、展示即売会での商品販売時の計算やお金の受け渡しができることを目標として取り組みを進めた。展示即売会当日は、接客時間の関係から、3年生が補助につくかたちでの対応となったが、『来年は、2年生だから一人で出来ます。』と、意欲を見せた。

②指示の視覚化（タブレットの写真で指示をみせる）

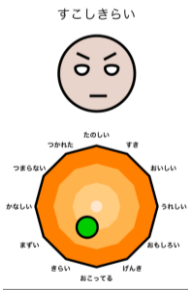
準備する物、作業手順を写真で示しながら説明する。また、行程と完成形を写真で示すことで見通しを持たせる。必要に応じて動画で動きや作業の見本を提示する。言語指示での理解の不足を補うことと、必要なときに再確認しやすく、作業手順の間違いを防ぐ事をねらいとした。手元近くで手順や要領を視覚で確認しながらの作業は、時間はかかるが正確に行うことが出来た点で成果と言える。



【作業指示写真】

2 自分の中の思いや感情の多様性に気づく

カレンダー 気持ちの記録 編集



感情は多様にあり、レベルもさまざまであることに気づいてほしい。そんな思いから、「こころく」を用いて、毎日こころの記録をしていった。

「こころく」に気持ちを記録していく中で、当初は『とてもたのしい』『とてもすき』『とてもおもしろい』の3種類しか選択しなかった。取り組みを継続する中で、アイコンの表情に着目させた。初期は、アイコンの表情を見て笑うだけであったが、自分の表情にも多様性があることに気付かせるため、アイコンの表情真似遊びを行った。つぎに、指導者もあえて大きさに表情を変えて見せるようにした。そのことにより、「先生、怒りました。」と顔まねをしてみせることも出てきた。「○○、怒られました。⇒しょんぼりした表情」「○○、泣きました。⇒悲しい表情」など、負の感情の時には弟や他者の感情表出を伝えるためにしようするようになった。また、様々な出来事や表情の変わり目に写真を撮り比較させた。

○対象生徒事後の変化

1 将来の自立に向けて身につけた知識を日常生活で活用できるようにする。

お金には興味を持ち、「使いたい」⇒「買い物に行きたい」という意欲につながった。

家庭の理解・協力もあり、専用のお財布をもらい、毎日お小遣いを数えるようになった。また、アプリでの学習→実践練習を繰り返す中で、金額とお金の支払い方(数え方)は定着した。「おつり」や「おおよその金額」の概念が身につく、プリント学習にも対応できるようになってきた。

目標であった展示即売会での対面販売は、自分の買い物は、意欲的に行ったが、計画的な金銭の使用には至らず、最後には買いたい物が買えず納得するのに時間がかかった。販売時には、上級生に確認してもらいながら、お金を受けとっていた。(受取金額の確認はできていなかった。)おつりも補助してもらいながら出した。

②指示の視覚化

長さの計測は、口答指示よりも視覚に訴える画像での指示の方が、間違えることは少なかった。画像により自分のタイミングで次の作業工程を確認できることで確実な作業につながった。やり直しも減った。

2 自分の中の思いや感情の多様性に気づく

5月～7月 表情カードと感情について学習

7月～ 「こころく」本格的に使用

常に「とても楽しい」か「とてもうれしい」を選択していた。

11月 普段と変わらない様子の日だったが、初めて「少しつまらない」を選択した。日記を見ても前日の様子にも変化はなかった。

12月 「きらい」を選択し、「どんなことが嫌いなのか？」を訊ねると、「～は、怖いです。」「～君は、うるさい。」「きらいです」と、自分が不快に思うことを伝えてくれた。

1月 「一人は、さみしいです。」「一人は、つまらないです。」と、思いを伝えること増えた。初めて、パニック状態になり、一人支援教室内入り大声で騒ぐ。不快な状況を大声をだし防ごうとしたようだ。その状態に異変を感じた協力学級の2名の生徒が職員室へ知らせに来た。教室へ行き本人に理由を聞くと「男子怖いです。」と、答えることはできた。2日後にも同じことが起きた。その日の理由は、「男子が、ドンとして怖いです。」であった。協力学級での会話の声、お昼の放送で流れる音楽、走り回る生徒の奇声や足音が不快で怖い

と主張し、パニック状態になったらしい。翌日は、生徒玄関にて大声で「一人で行けませ
ん！」「佐伯先生、助けてください！！」と叫ぶ。

一人で、3階の教室に行くことを拒むようになり、「佐伯先生は、どこですか。助けてく
ださい。」と登校時玄関で叫ぶようになる。(この日から、朝から教室移動を見守り、休み時
間も張り付き、給食は特別支援学級で教師・支援員と3人で食べるようになる。朝の会・帰
りの会への参加もできなくなった。)

2月 登校時、職員室まで、担任を探しに来る。不在時に、特別支援学級担当教諭が対応するが、
授業等で意思疎通ができる職員を選び、自分の伝えたいことを訴える。

不快に感じる状況を少しずつ伝え、状況回避をするための手段として、特別支援学級の「安
心できる場所」を選択して学習・生活する場所を選択するようになってきている。

「伝えたいこと」が現在から過去のことまで山のようにあり、それを伝えるタイミングが
やってきたようだ。

《この1ヶ月で伝えてきた不快だと思うこと》

- ・トイレで騒ぐ、男子の声
- ・教室の椅子や机が一斉にガタガタいう音(挨拶などの時?)
- ・廊下で遊んでいる男子の声
- ・男子が遊んでいるときの格闘ポーズが自分に向けられる不安
- ・突然声を上げて走り回る子どもや同級生への恐怖
- ・ふざけて飛び回る行動をとる子への恐怖
- ・乱暴なドアの開閉の音への恐怖
- ・激しいリズムのドラム音の含まれた音楽

など

これらを伝えるために、タブレットで動画などを撮影したり、写真を見せたりしながら、
伝える補助具として使用した。また、「こころく」の表情をみせたり、その表情を真似て見せ
たりと、自分の不快レベルを伝えるためにも使用した。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

1. アプリによる疑似体験を通して、実践したい意欲につながったのではないかな。
2. コミュニケーションや指示理解の補助として画像(写真や動画)が役立つことを実感出来たのではな
いか。

・エビデンス(具体的数値など)

1. 保護者の協力により、自分の財布を持たせたこと、お小遣いがもらえたことなどによりお買い物に対す
る興味が高くなっている。

「お財布を持ってきてください。」という、目をキラキラさせ、「自分で買います！」という。

9月の社会見学の時には、自動販売機で飲み物を買うとき、ちょうどの金額は入れられず、おつりが出
てきたことを喜び、「お金が増えました。」と言っていた。

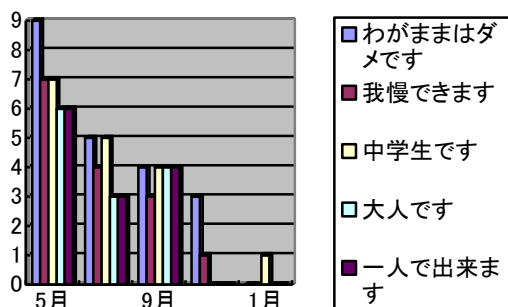
11月のお買い物学習時には、買いたい物をどんどん手当たり次第買ったため、後で本当に欲しいもの
が買えずに我慢しなければならなかった経験をした。そのときには、買った物とお財布の中身を何度も
確認していたが、納得いかない様子だった。

2月のお買い物学習では、事前を買う物と金額を調べ、予算内に収まるように考えていた。現地では、
予定より数十円余ったので、更にお菓子を買って、予算を全て残さず使い切れたことに満足し、財布

の中身を確認することはなかった。

2. コミュニケーションを支えるためにタブレットは、大いに役立ったと感じている。

彼の中で口癖のように毎日発せられていた「わがままはダメです。」「我慢できます」「中学生です」「大人です」の言葉が、顕著に減っている。それと相反して、増えているのが「助けてください」「怖いです」「一人はさみしいです」といった言葉である。下の表にある言葉を自分に言い聞かせるための呪文として言っていたならば、本心を吐露できずにいた可能性がある。



【口癖？の推移（発言回数／日）】

「こころく」で、感情の種類やレベルに多様性があり、表出しても良いことに気づき、思いを伝えたいと変化してきた。失敗することに抵抗があったことも、動画で教師の失敗した演習を繰り返し見て、何度も笑い、「失敗しても大丈夫です」と言うようになった。

「助けてください」「怖いです」の理由を伝えるために彼が選んだ手段が、写真や身振り・手振りで何がどうして怖いのかを繰り返し伝え、その恐怖から逃れるための手段と方法を獲得していった。「伝えることで、自分の気持ちが伝わった」という体験となった。

現在、学年団教師や生徒の理解の元、ゆっくりと協力学級への教室復帰を進めている。相手によっては、断れない彼の性格が弾みとなって協力学級に入れたこともあった。（その他のエピソード④参照）今まで出来なかった「他者の思いを受け止める」きっかけとなった。

【その他のエピソード】

①お金の学習も発展し、アプリ『支払い技術検定』で、お金の支払い方を勉強している。手持ちのお金で効率よく支払うことを学ぶための学習段階としてとり入れた。現在小学生レベルですが、本人「中学生です！」と、アプリ相手に格闘中です。

②コミュニケーション面で、登校時から「バカ、バカ」と言い続けるので、「何（誰）に対して言っているのか？」と問うと、「バカは悪い言葉です、言っちゃダメです。」と答えたが、3日目くらいには、「うるさい人、嫌いです。『どん』とします。」といった。1週間後には、「〇〇が、×月△日、～をしました。だから、バカです。怖いです。」と、自分の苦しみの原因を伝えようとしている。自分の中に抑えきれない感情があることに気づき始め、「表出したい思い」がわき上がっている様だ。

③現在、「友だち」の定義を学習中です。

「友だちはいますか？」と問うと、協力学級でお世話をしてくれる男の子の名前を答える。「一緒に遊んだり、困っている事を伝えると助けてくれますか？」と問うと、「???」。特別支援学級内での学級交流授業で、「遊び」や「ゲーム」を通して集団作りを開始。オセロ、ジェンガ、福笑い、トランプなどで遊びながら仲間やルールを学んでいる。ゲームの途中、笑ったり、負けそうになると「待ってください。間違えました。」と、慌てたり、おどけて見せたりと、表情や言葉が豊になってきている。

④協力学級に行くことを拒むようになり2週間が過ぎたころ、学年団で話し合いを持ち、協力学級復帰へのステップと期間の目途を立てた。

ステップ1：教室が静かになる「朝読書時間」に参加＋交流授業（音楽、美術）への参加

ステップ2：朝の会・帰りの会への参加＋交流授業（上記に加え家庭科調理実習、技術木工作業、体育実技）

ステップ3：給食の配膳された食事を取りに行く

進級時に学級の再編成もあることから、3月中旬までに完全復帰を学年職員団として目指すことを確認した。協力学級担任の配慮もあり、配膳時間に係生徒以外は着席して待つようにルールが変更になった。それを機に教室で給食が配膳されるのを待つようになった。班の向かいの席の生徒が不在の日に学年副担任の教師が座った。「いただきます。」を協力学級でした後、退席し支援学級に戻ろうとしたときに「今までいたんだから、ここで食べていきなよ。一緒に食べよう。」と言われ、断れない性格(?)からなのか反射的になのか「はい。」と言ってしまった。そのあと助けを求めて目線を合わせてきたが、知らないふりをしていると、副担任に対し「はし、もってきます。」と言い、私に「はし・・・一緒に行きます。」と言ってきた。

その日を境に、協力学級で給食を食べることができている。

折り合いをつけることを学んでいる。